「活動の概要と研究成果」

NO.J2417

活動題目： 中国近代化のひずみ――中華人民共和国建国以後の文学における男子学生の表象に着目して

所属：北京第二外国語学院

氏名：小川主税

本研究は中国の近現代文学の分析を通じて、近代化がもたらした光と影について考察を進めるものである。

近代中国における光と影について考えるにあたり、本研究で着目したのは「青年」（あるいは「新青年」）なる新たな理念である。近代中国の言論界で盛んに論じられたテーマのひとつがこの「青年」であり、旧来の価値観とは異なる近代社会にふさわしい知識人男性のあり方として提唱された。だが、文学テクストを丹念に読み進めると、「青年」なる理念が少なからぬ知識人男性＝男子学生に対する重圧としても機能していた事実が浮かび上がる。本研究ではこれまでの研究において見落とされてきた後者の表象に着目し、近代中国が抱えていた構造的な力学や抑圧的なあり方について考えるための第一歩としたい。

以上の問題意識にもとづき、今年度の研究では、20世紀中国文学とりわけ人民共和国建国以後の文学に描かれる男子学生の表象を読み解きながら、「青年」という理念からこぼれ落ちた男子学生たちの存在に光を当ててきた。具体的には、民国期から人民共和国建国初期にかけて活躍した北京の作家・老舎（1899-1966）を取り上げ、彼の描く男子学生像の特質について、歴史学・社会学の知見を踏まえながら考察した。興味深いのは、老舎が複数の男性と一人の女性との間に生まれる愛のゆくえについて繰り返し書き綴っていた点である。近代以降の中国社会においては、男女の自由意思にもとづくモノガマスな関係が知識人の間で理想とされたが、老舎の諸作品には彼らが抱えた性差＝ジェンダーの問題が蟠っている可能性がある。以上の考察については、2025年1月に「多男一女のゆくえ――老舎『趙子曰』におけるジェンダー表象」と題する論文を『日本中国学会報』第七十七集に投稿し、査読を経てすでに採録が決定している。

本研究が考察対象とする男子学生像を読み解くためには、社会学とりわけジェンダー学の視点が不可欠である。次年度の研究においても、男性性研究の知見を取り入れながら研究を進めてゆく必要がある。